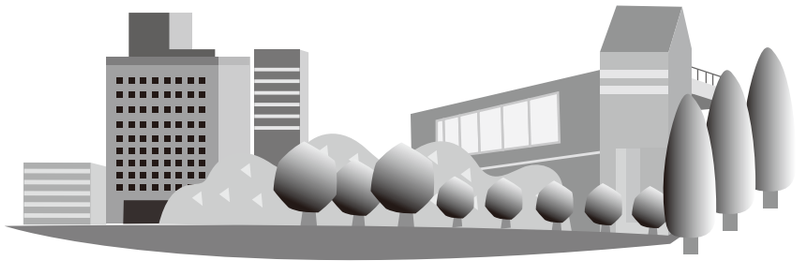
医師という仕事　―上―

匿名

世の中では、人は物を売ったり、いろいろなサービスを提供することでその代金としてお金をもらっています。例えば、皆さんはお店で物を買ったり、カットハウスで髪の毛を切ってもらったりすると、買った物やサービスの代金としてお金を払います。そして、お店の人は「ありがとうございます」といってお礼を言われますね。その逆に、お客さんから「ありがとうございます」とお礼を言われる職業があるなんて、信じられますか？　私の生業としている医者という仕事は、普通に仕事をしていてもお客さん（患者さん）からしばしば感謝の言葉がいただける、そんなありがたい職業です。というわけで、人に喜んでいただいて自分もうれしくなる、お医者さんと医療の仕事について話してみたいと思います。

1.医師になるには

大学の医学部に入学して卒業し、医師国家試験に合格する必要があります。大学には、国公立大学と私立大学があり、それぞれに総合大学と医学部だけの単科大学があり、6年間の修学期間が義務づけられています。個人的な意見ですが、大学生活を楽しむという点では総合大学に一日の長があるように思います。総合大学では、カリキュラムによっては教養課程の時に他の学部のいろんな分野の授業を受講したり、本学のクラブに入部して学生生活を楽しむことも可能です。なかには体育会の本格的なクラブに入って4年間活躍するような猛者もいます。入学後の勉強については、医学部といっても学業が特に厳しいわけではありません。受験では医学部は理系になっていますが、理系の頭脳より、膨大な知識をひたすら暗記する記憶力が重要だったという印象があります。理系の勉強が苦手な人でも、受験勉強さえクリアーすれば入学後は問題ないでしょう。大学のカリキュラムによっても異なりますが、4年頃に臨床実習が始まります。これは、大学病院や実習協力病院で、指導医のもとに実際の診療を学ぶものです。自分が内科系か外科系か、この時に実感することが多いようです。

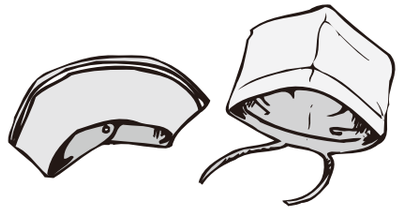


2.医学部を卒業すると

医学修士という資格がもらえますが、そのままでは医師にはなれません。ほとんどの人が医師国家試験を受けて医師免許の獲得を目指します。医師国家試験は選抜試験でなく資格試験であるため、合格率は90％前後と大学入学試験ほどは狭き門ではありません。

医師免許を取得後の進路は、基礎医学と臨床医学に分かれます。基礎医学を志す人は研究室に所属し、臨床医学を志す人は医療施設で卒後研修を受けます。私は臨床医の道を選択したので、今後は自分の経験をもとに、臨床医学の進路を中心に話していきたいと思います。

当たり前のことですが、医師免許取得後すぐに医療行為が出来るわけではありません。私達の頃は、“先輩のあとをついて回って、技術と知識は盗んで身につけろ”といった風潮が色濃く残っていた時代でした。最近は臨床研修制度が整備され、新人医師は2年間で内科、外科と救急医療、産婦人科、小児科、精神科で研修を受けることが義務付けられています（今後臨床研修の期間が1年間に短縮される可能性があります）。2年間の研修終了後は自分の選択した診療科で働きながら経験を積んでいきます。自分が何科の医者になるかを決めるのは誰でも迷うところです。医療の仕事は、どの診療科や分野を選んでも病気や障害で苦しんでいる人がおられ、治療を行う医師を必要としています。目の前におられる患者さんをいかに上手く治療して満足していただくか、という点を主眼にして診療に従事していくと、自然と自分の専門領域が決まってくると思います。新人医師にとっては、若いときにどんな先輩に指導してもらうかで自分の運命（診療や研究に対するスタイルやスタンス、学閥関係など）が決まってしまうということもざらではありません。医師という職業は、ある意味「徒弟制度のなかで師匠や先輩について修行して一人前になっていく職人」といった面があるのは否めません。



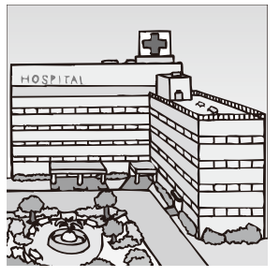
3.3つの仕事、臨床、研究、教育について

私達は、意識するとせざるとに関わらず、臨床、研究、教育の3つの要素を自分の中で優先順位をつけて仕事をしています。臨床とは患者さんの診療を行うことで、仕事の中心となります。しかし私達の仕事は診療だけをしていればいいわけでなく、研究活動を行う事と後輩医師や医療スタッフを教育する事も重要な職務と考えられています。研究に専従したい人は大学院に進学する事が出来ます。大学院では4年間で学位論文を作成し、博士号を取得します。大学院に入学しなくても、臨床医として診療しながら研究をして論文を発表し、大学の教授会で認められれば博士号を取得する事が可能です。博士号を取ると医学博士の称号を得ることが出来ます。

医師という仕事　―下―

匿名

4.色々な選択肢がある、医師の働き方



一般的な医師の働き方は、病院に勤務して経験を積み、勤務医のままでキャリアを終えるか、クリニックを開業するか、といったパターンが多いようです。病院には、大学病院、国や地方自治体が設立した国公立病院、財団法人などの法人の設立した病院、個人病院などがあります。大学病院で勤務する医師は、診療に加え、実験や研究をして日本や海外の学会で研究発表したり、医学雑誌に論文を投稿することが主な職務となっています。また、医学部学生や新入医局員の臨床教育と大学の教員としての講義も重要な仕事です。大学病院以外の勤務医でも、診療だけでなく学会活動が求められます。また、クリニックを開業した医師は地域医療の担い手となりますが、学術的には地域の医師会で活動することが多いようです。

勤務医のなかには田舎や離島で僻地医療に従事する人もいます（ドクターコトウ診療所というテレビドラマがありましたね）。最近では、どこの病院にも勤務しないでフリーランスで仕事をするといった生き方を選択する人も出てきています。その他の働き方には、生命保険会社や製薬会社に勤務する、厚生労働省の技官になり医務官僚として医療政策に関わる、プロやアマチュアスポーツのチームドクターになる、大学の教諭になる、国境なき医師団のような国際的な活動をする、外国で医師免許を取得して海外で医療を行う、船医になる、等々。このように、医師の生き方は様々な選択肢があり、比較的自由度が高いと言えるでしょう。また、本業以外に、医学や医療に関連した著書を出版する、サプリメントのような医薬品類似食品を販売する、自分で考案した医療用装具を販売する、といった活動をしている人もいます。少し変わったところでは、医師になってから小説家に転身したり、映画監督になったり、冒険家になった人もいます。最近ではテレビタレントになっている人もいるようですね。こうなってくると、医師という生き方は、医学や医療から得たことを通じていかに自己実現するかということ、と言えるかもしれません。

5.私自身の仕事について

私は公立病院の勤務医で、整形外科を専門としています。整形外科とは骨、関節、脊椎、神経、筋肉などの運動器の外傷（けが）や疾患（病気）の診療を行うところです。

病院での仕事の内容は、診察室で患者さんを診療する外来業務、入院患者さんの治療を行う病棟業務、医療的な検査や処置、手術が主な業務です。そのほかに、当直、市民検診、在宅医療患者の往診、身体障害者認定、介護保険の主治医意見書作成や各種医療保険の書類作成、など多岐にわたっています。また、所属する大学医局のリウマチグループの一員として研究活動に参加しています。さらに、地域の研究会で研究発表をしたり、医師会で学術講演会の講師を依頼されることもあります。また、日本整形外科学会の専門医および日本リウマチ学会の専門医として学術集会や講演会に参加するといった活動をしています。立場としては、勤務する病院の職員、大学医局の医局員、医師会の会員、所属する学会の会員、といった複数の立場で仕事をしていると言えるでしょう。業務内容としては頭脳労働が多いように見えますが、実際は体力と健康が重要な、肉体労働的な要素が多い事を日々実感しています。この点では、学生時代にスポーツをして体を鍛えていたことが役立っていると思います。私達の仕事は、しんどいことも多いけれど日々学ぶことがあり、感動もある職業だと思っています。

6.最後に、病院で働く職業について

病院に勤務して医療に従事する仕事には医師以外にたくさんの職種があります。最も身近に知られている看護師、薬のエキスパートである薬剤師、診断や治療に欠かせない検査の担い手となる臨床検査技師、レントゲン検査の専門職である放射線技師、食事療法のプランを立てて患者さんの栄養管理をする管理栄養士、リハビリに従事する理学療法士や作業療法士、言語療法士、医療と福祉の橋渡しとなるアドバイスをする医療相談員MSW（メディカルソーシャルワーカー）、事務職員には医療事務、臨床病歴管理士など、様々な職種がありますが、多くが国家試験で資格を獲得した専門職です。病院はこれらの専門職が協力して総合的に医療を行っていく施設です。医療に関わる仕事は、直接人に向きあっていく必要があるので、必然的に自分のしている仕事の結果が目に見えやすいと思います。プロ意識を持って最善を尽くし、その結果「ありがとう」と喜んでいただいたときには、多忙で疲れていても、逆にこちらが癒されるような気さえもします。まさしく、人に喜んでいただいて自分もうれしくなる職業だ、と実感します。皆さんも、こんな素晴らしい職場である医療現場を自分の働く場に選んでみませんか。